

## 第32回泌尿器科漢方研究会学術集会

代表幹事:堀江重郎(順天堂大学大学院医学研究科泌尿器外科学)

日時:2015年6月20日(土) 13:00~18:05

会場:コクヨホール(東京都)

### 相生相剋を基にした漢方薬の治療戦略と 大建中湯の新たな可能性

信州大学医学部 泌尿器科

○皆川 倫範、小川 輝之、石塚 修

相生相剋は漢方医学の基本的な概念で、狭義には臓器間の相互作用を理解するのに役立つ。個々の臓器が他の臓器に促進的あるいは抑制的に作用し、全体で統制のとれた体系を維持する臓器間制御機構をいう。一方、近年の西洋医学的基礎研究では、neural cross-talkと呼ばれる神経生理学的臓器相互作用が注目されている。Neural cross-talkは、一つの臓器から入った求心性神経伝達が、上位中枢に至るまでに他の臓器への遠心性神経伝達に影響を及ぼすことを言い、当初は正常臓器の機能制御に重要とされていた。ホルモンやマクロファージなどを介した臓器間の影響が報告されていることを鑑みると、non-neuralな面を含めた臓器間のcross-talkは、臓器制御に於いて重要な役割をもつ概念であるし、機能性障害の病態メカニズムを理解するうえでも大いに役立つ。以上のように、相生相剋とcross-talkには概念的に共有される部分がある。他方、漢方薬には、一つの方剤に多種多様な効能が記載されている。漢方薬が生薬で、多彩な成分を含むからだと理解すればそれまでだが、一つの方剤を開発する過程を考えると、なんらかの標的が絞られて開発されるべきだろう。では、なぜ漢方薬は一つの方剤に多種多様な効能を持ちうるのだろうか。それは、疾患への理解が多臓器にわたって包括的だからではないだろうか。相生相剋の概念を念頭にそれら方剤の効能を見てみると、無縁とも思われた各効能にも関連性を見出すことができる。我々は、相生相剋の概念を念頭に、漢方薬を用いた新たな治療戦略を構想している。その第一歩として、大建中湯と頻尿の関係に注目した。大建中湯の効能は、便秘・腹部膨満感・冷えである。その成分が生姜・山椒・人参であることを考えると、その効能も理解しやすい。無論、その効能のなかには頻尿はない。しかし、冷えと便秘は、排尿障害との関わりは深い。冷えると排尿間隔が短くなることは、経験的に共感できる事で、実臨床でも冬の頻尿を訴える患者を多数経験する。さらに、便秘は頻尿の増悪因子である。前立腺肥大症の患者で便秘から尿閉になることも臨床的に多々見受けられる。Cross-talkの観点からも、直腸と膀胱機能の関連は深い。従って、便秘や冷えは排尿障害の治療において考慮されるべき重要な要素である。しかし西洋医学的な診療体系に於いては、そのようなことはあまり重要とされていない。特に冷えに関しては西洋医学的な概念すら存在しない。そこで大建中湯の効能に振り返りたい。冷えと便秘を併せもつ頻尿の患者は珍しくない。そのような患者に大建中湯を処方すれば、便秘・冷えの解消とともに、間接的に頻尿の治療として有効性を見出せる可能性がある。そのような仮説のもと、我々は大建中湯を用いた頻尿治療の予備的な研究を行ったので、本学会で供覧したい。